

## テレビドラマの日本語字幕における注の機能主義的分析

—中国宮廷ドラマ『步步驚心』を例に—

鄭 雁天

(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程)

*In Audiovisual Translation, translator's notes are seldom used mainly because of spatial and temporal limitations. While this paper will focus on a large amount of use of translator's notes, especially on culture-specific items, in 『步步驚心』, a Chinese TV drama which takes a background of Qing Dynasty. In Functionalist Translation Theory, it is thought that the choice of translation strategies is decided by the intended function (also known as 'skopos') of TT(target text)s. Thus in this paper, an analysis will be made on how the translator's notes are used in the TT and what kind of effects they have brought to it, and then the relationship between the use of translator's notes and the 'skopos' will be explored. Regardless, the heavy usage of notes, especially on culture-specific items, would be seen as a strong position of the translator in cross-cultural communication.*

### 1. はじめに

文芸翻訳をはじめとする通常の翻訳においては、翻訳者が注を付けることによって訳文に補足・説明・解説を加えることがよく見られるが、視聴覚翻訳の場合、時間・空間などの制約があるため、注は一般的には難しいと考えられる<sup>1</sup>。特にその主流形態の1つである字幕<sup>2</sup>では、注を付け加えるどころか、元発話の削除、凝縮、改変といった方法が頻繁に用いられ、また実証的なデータによれば、字幕では元の台詞の43%が失われるという (de Linde and Kay, 1999:51)。とはいえ、作品によっては注が多用されるものも実は存在する。そこで本稿では、注が用いられている視聴覚作品の字幕を取り上げ、登場人物や異文化要素に関する注が、作品全体を通してどのように取り入れられているかを分析する。

字幕では通常難しいと思われる注の使用が作品によってあえて大量に用いられることは、その翻訳によって達成しようとする何かの目的に緊密に繋がっていると考えられる。これは、まさにスコポス理論の中心思想に当てはまる。スコポス理論では、

---

ZHENG Yantian, "An Analysis on the Translator's Notes in Japanese Subtitles of TV Drama from the Viewpoint of Functionalist Approach: By the Case of Startling by Each Step, an Imperial Court Drama," *Interpreting and Translation Studies*, No.14, 2014. pages 53-73. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

翻訳の目的、いわゆる「スコポス」が翻訳方法を決定すると主張すると共に、翻訳を一種の異文化コミュニケーション活動と捉える。とりわけ様々な制約によって情報の取捨選択をせざるをえない字幕翻訳においては、異文化要素の何をどのように重視して視聴者に伝えていくかは、そのスコポスに直接関わるものと思われる。そこで、異文化要素の翻訳方略に関して、字数制限などにもかかわらず、原作になかった内容を注によって追加することは、その目的設定による結果の表れの1つであり、そこから翻訳時の操作の姿勢も読み取れる、という立場から分析したい。具体的には、中国のテレビドラマである『步步驚心』を例にして、その日本語字幕における注の多用に焦点を当てる。まずは量的分析により、どの要素に対してどのような注が付けられ、それがどのようなスコポスに繋がるかを明らかにする。その上で、注の内容と付け方の詳細な質的分析により、それらの注が字幕全体にどのように働きかけるかを考察し、さらに注という翻訳手法が字幕翻訳に有効であるかどうかについても検討する。

## 2. 研究対象と研究方法

### 2.1 研究対象

本稿では、清の時代を背景とした宮廷ドラマ『步步驚心 (ブーブージンシン)』<sup>3</sup>(日本語タイトル:『宮廷女官 若曦 (ジャクギ)』)を分析対象とする。これは、中国人女性作家桐華(トン・ホア)が2005年にインターネットで発表した小説『步步驚心』を実写ドラマ化した作品であり、2011年9月10日より中国湖南省の衛星TV局で放送され始め<sup>4</sup>、その後中国全土において数多くのTV局で放送され、台湾地区・香港特別行政区の中華圏をはじめ、韓国・マレーシア・シンガポール・アメリカ・カナダ・日本でも放送された(放送時期順)。日本では、アジア・リパブリック出版社により輸入され、2012年10月08日より、BSジャパンにてDVDノーカット版(計35話、1713分)で放送され、大反響を得たという。本稿では、DVDノーカット版の全35話を分析対象とする。

この作品は特定の時代と文化背景の設定であるため、セッティングや文化要素などが現代劇と大きく異なり、特に台詞に関しては古代風表現は言うまでもなく、宮廷における言葉遣いもまた特徴的である。また、本作品は古代へタイムスリップをする物語でもあるため、現代と古代の要素がいかにかに1つの作品の中で融合されるかがまた見所となり、それが字幕翻訳によってどのように表現されているかなど数多くの観点を含んでおり、視聴覚翻訳の異文化要素について研究する素材としても適していると思われる。そのあらすじを簡単にまとめると、以下の通りである。

張暁(ちょう・しょう)という現代中国の女性が、ある日車の事故によって18世紀初頭、康熙帝が支配する清の時代にタイムスリップしてしまい、第八皇子の側室・若蘭の妹である馬爾泰・若曦(ばじたい・じゃくぎ)という少女の身に入り込んでしまう。現代に戻ることに失敗した張暁は若曦として生きていくことを決め、その後お妃選びを機に康熙帝や皇子たちにお茶を入れる女官として宮廷入りする。歴史の結末

を知っている彼女は徐々に宮廷の生活に馴染んでいき、康熙帝や皇子にアドバイスを  
 するなど才女として重宝されるが、それぞれ第八皇子と第四皇子との間で芽生える恋  
 に葛藤しつつ、朝廷における9人の皇子たちによる皇位後継者争いに巻き込まれてい  
 く。

## 2.2 研究方法

翻訳における注とは、文学作品や論文などの書物では、文章や用語についての説明、  
 補足、解説を脚注あるいは尾注の形で、本文外に提示するのが一般的である。しかし、  
 視聴覚作品の翻訳では書物の注とは大きく異なる。そこで、字幕における注の概念を  
 確認しておく必要がある。本稿では注として捉える対象を、以下のように規定する。

まず位置に関しては、通常の子幕がスクリーンの下に提示されるのに対し、注はス  
 クリーンの両側に提示されるものとする。さらに内容に関しては、①登場人物が誰で  
 あるかの提示と、②字幕（台詞）、映像内文字情報（手紙や看板など）、背景知識の三  
 項目に関する説明・補足・解説、の2種類に分類できるものとし、また元のオリジナル  
 版にある注は本稿では対象外とする。以下の説明では、①を人物提示、②を内容提  
 示と簡略化する。

実際の分析においては、原作ノーカット版の日本語字幕<sup>5</sup>（DVD版、全35話、計  
 1713分）を対象として注を全て抜き出し、上記の2分類に分けた上で分析を行う。ま  
 ず、抽出した注の全データを対象に、量的分析を行って全体的傾向を調べる。その際、  
 人物提示に関するデータは登場人物毎に分ける。内容提示の注については、様々な分  
 野にわたる異文化要素に関するものであるため、実際の分析に適合した分類法が求め  
 られる。異文化要素を表す用語としては、*Realia* や *CBI* (*Culturally-bound items*)、*CSI*  
 (*Culture-specific items*) (Terestyényi, 2011; Franco, 1996)、*ECR*<sup>6</sup> (*Extralinguistic Cultural*  
*Reference*) (Pedersen, 2011) などがあるが、これらの用語は完璧に重なる概念とは言  
 い切れない。Terestyényi (2011: 13) によれば、これらの用語をいかに明確に定義する  
 かは難しいところであり、例えば *Realia* というのはラテン語起源で、“the real things”  
 という意味であるが、物質的な文化物だけではなく、特有の文化を指す言葉も含むこ  
 ともあるという。実際に、こうした用語が用いられる際には、応用する分野が異なっ  
 ていたり（例えば文芸翻訳か視聴覚翻訳か）、分類カテゴリーが共通していなかったり  
 する（例えば大まかな分類もあれば、細かい分類もある）。こうした事情から、本稿で  
 は異文化要素の定義についての更なる詳しい議論は扱わず、本稿と同じジャンルであ  
 るテレビ字幕における異文化要素を扱ったペダーセンの研究を紹介しておきたい。  
 Pedersen (2011: 43) では、異文化要素を表記している言葉を *ECR* (*Extralinguistic Cultural*  
*Reference*) と命名し、以下のように定義している。

*Extralinguistic Cultural Reference (ECR)* is defined as reference that is attempted by  
 means of any cultural linguistic expression, which refers to an extralinguistic entity or

process. The referent of the said expression may prototypically be assumed to be identifiable to a relevant audience as this referent is within the encyclopaedic knowledge of this audience.

ペダーセンの定義の前半に関しては篠原(2013: 82)では、「言語外文化関連記述(ECR)は文化的言語表現による言及であり、言語外の存在物やプロセスと関係する」と訳しており、定義の後半では、ECRはそれと関係する特有の文化背景を持つ受容者に理解されるものだという点が強調されている。本稿ではこの定義に沿って分析したい。ただし、Pedersen(2011: 59-60)では、異文化要素が12項目に分類されているが、この分類は本稿のケーススタディには合わないため、そのまま採用することはできない。例えば、この12分類の中でまったく該当しない項目(技工物)がある。そこで、中国の特定の時代背景の宮廷ドラマという作品の特徴と、字幕における注という具体的状況に合わせた新たな分類法が必要となる。こうした事情を考慮し、上記の先行文献を基にしつつ、次のように新たな8分類を提案する: ①官職名と呼称、②社会一般、③芸術、④人物、⑤機関、⑥地名と場所、⑦歴史背景、⑧その他。とはいえ、宮廷ドラマであることが本作品の一番大きな特徴となっているため、注全体をまた大まかに宮廷要素と非宮廷要素と2分類することも考えられる。以上を踏まえて、実際の分析と考察においてはこの視点も入れつつ、対象作品に含まれるすべての注を上述の8領域にカテゴリー分けして、どのような傾向で注が用いられるかを明らかにし、それがどのような翻訳目的に繋がっているかを探っていく。合計35話で1713分というデータの分量の多さが、データの説得力の保証にも繋がると言えよう。また、分析の第2段階では、個別の具体例を挙げながら質的分析を行う。人物提示と内容提示内の各分類よりそれぞれ具体例を提示しながら、それらの注が字幕全体においてどのような効果をもたらすかを考察した上で、注の有効性について考える。

### 3. フェアメーアによるスコpos理論

翻訳研究は長い歴史を経てきた。「逐語訳」か「意味訳」かをめぐる論争が中心であった当初から、様々な観点から研究が充実してきた今日に至るまで、時代の発展と共に、翻訳学もより包括的になり、多元的な学問分野として盛んになってきている。その歴史の流れを、藤濤(2007)では、原文志向から訳文志向へと変化し、また翻訳の捉え方が、言語のコード変換から異文化間コミュニケーションへとシフトしたと見ており、そして、その代表として1970年代より発展してきたドイツ発祥の機能主義的翻訳理論<sup>7</sup>を挙げている。卞(2008)では、機能主義的翻訳理論の背景と内容について、包括的かつ系統的に紹介されているが、紙幅の関係で、本稿では機能主義的翻訳理論に関する各先行文献に基づき、分析に当たって主に扱われるフェアメーアのスコpos理論を中心に、簡潔にまとめておく。

Reiß and Vermeer(2013)によれば、言語行為はコミュニケーション行為であり、その内、翻訳行為は特別な言語行為と見なされ、必ず何らかの目的が伴われており、何よ

り、この目的が翻訳方法の決定において最も重要な要因である。それが、いわゆるフェアメーアの「スコpos (Skopos<sup>8</sup>) 理論」の核心的な思想となり、また機能主義的翻訳理論の最も重要な論点でもあった。スコpos理論では、行為はその目的によって決定されると主張されている。したがって、翻訳者が翻訳方法を選定する時に最初に考えなければならない要素が、その翻訳によって達成しようとする目的であり、翻訳の最終的な形態もそれによって決まる。これがいわゆる「スコpos・ルール」の主な内容である。「スコpos・ルール」の他に、TT(Target Text)が目標文化と社会背景において目標受容者にとって十分解釈可能であるべきという「一貫性ルール」、及びTTがST(Source Text)とある関連性を保つべきという「忠実性ルール」も提唱されている。

フェアメーアの翻訳理論においては、翻訳は一種の異文化間のコミュニケーション行為として捉えられ、すでに存在するSTではなく、むしろこれから完成されるTTに重点が置かれており、目標テキストは目標文化及び具体的なコミュニケーション状況の下で、目標側の受容者が望むような形に合わせて、最終的に果たしてほしい機能及び達成したい目的にしたがってなされるべきだとされている。しかし、その機能と目的は必ずしも同じではない。同じSTでも、目的が異なれば、全く違う方針で訳出された違う訳文となる場合がありうる。言い換えると、スコpos達成のためであれば、すべての翻訳方略が選択範囲に入る。今まで中心概念として扱われてきた「等価」はむしろ、それら様々な方法の中の1つとして現れる。

それでは、スコposは誰が決めるのだろうか。ピム(2010)によれば、実際の翻訳実践となると、支払いをするクライアントや、実際に仕事を提供する人、翻訳者、翻訳者に助言を与えるかもしれない各分野の専門家、翻訳者を管理する編集者、最終的な読み手であるエンドユーザーなど、さまざまな社会的行為主体者が関与する可能性があり、翻訳の目的について明確な合意がなされていない場合に、翻訳者は一体どのような意思決定を行うべきかは未だ解決案が存在しないという。また、翻訳の目的によって、翻訳の方略が決定されるというのはものの、実際に、具体的なコミュニケーション状況や、翻訳者自身の主観的意識、外在的な社会的要因など、さまざまな要因が最終の方略決定に影響を与えることは否定できないだろう。

フェアメーアのスコpos理論は、従来の起点テキストから目標テキストへと重点を変え、翻訳を決定する上でもっとも重要なのは目的だと提唱し、翻訳実践および翻訳批評上において大きな方向性を示した。具体的にどのような翻訳方法がなされるべきかに関しては言及していないが、翻訳の一般理論として、疑いなく画期的転換を遂げたと言えよう。しかし、これまでスコpos理論もまた批判を浴びてきた。ピム(2010)では、「翻訳するのは言葉であって、機能ではない」、「目的は起点テキストの中に見出される」、「目的(スコpos)という概念は理想主義である」など、幾つが挙げられている他、卞(2008: 200)では、スコposが全文においての一貫性に対し、「翻訳の目的によって決められた翻訳方略は、全般の方針においても個々の翻訳という細部においても、最初から最後まで貫けるか」と問いかけている。確かに、スコpos理論で主

張されている目的という観点からは、例えば文芸翻訳のような原著を尊重すべきで、目的など不要とも考えられる分野には応用しにくい部分がある。また翻訳のスコposが翻訳方略を決めるとはいえ、実際の翻訳プロセスにおいては、様々な要因からも影響されるため、いったい「スコpos」がどこまで効力を発揮できるかについても疑問が生じるところである。しかし、社会の発展とともに、異文化交流がますます盛んになって翻訳テキストも日に日に多様化している中では、スコposを1つの大きな指針として、特に本稿で扱われる視聴覚作品のように、同じSTが様々な目的によって異なるTTに翻訳できるという可能性について考える上では非常に有益な理論だということは確かであろう。

#### 4. 注使用の全体的傾向

##### 4.1 注の多用と分布

本稿が分析対象としている作品全体において、どのような注がどの程度使用されているかについて、2.2 で確認した範囲規定に従い、人物提示および内容提示に関してそれぞれ調査した。その結果をまとめると、表1のようになる。

表1 注の分布

注の分布 (全体)	延べ語数 (token)	異なり語数 (type)
人物提示	281	31 (21) *
内容提示	144	84
合計	425	115
平均値 (合計/35 話)	12	3

\*注: 異なり語数 (type) は注の内容が異なれば数えることとするが、人物提示に関しては、同一人物であっても身分の変化に相応して提示内容が異なることもあるため、実質の人物数を( )内に提示する。

表1で提示した通り、全作品を通し、合計425回の注が用いられていることが明らかになった。平均すると各話12回ずつであり、時間に割り当てると、ほぼ4分ごとに注が1回現われるペースとなっている。すでに触れたように、字幕翻訳では、作品をオリジナルのまま残している反面、台詞をテキストに訳して画面の下に挿入するため、視聴者側に認知負荷をかけることになる。その上、大量の注がスクリーンの両側に提示されると、視聴者には更なる負担となるだろう。そうしたリスクを負ってまで注を追加して伝えようとするのは、その内容自体が作品理解に重要であるとの判断だけではなく、翻訳者が翻訳過程において異文化理解に努める姿の表れとしても捉えられるだろう。それでは、その内訳を詳しく見てみよう。

#### 4.2 人物提示の結果と分析

登場人物が画面に現れたとき、それが誰であることを説明する注が人物提示であるが、425回の注全体のうち人物提示が281回であり、全体の3分の2を占めている。登場人物ごとに分けてまとめた結果は、表2のようになる。ここから明らかなように、281回の注が21人の人物に繰り返し使用されていることが特徴的であり、一人で30回も繰り返し注が付けられる人さえいる。

表2 人物提示の内訳

人物	回数	人物	回数	人物	回数
第八皇子（廉親王）	30	第九皇子（九皇弟）	17	敏敏	5
第十三皇子（怡親王）	28	康熙帝	17	綠蕪	5
若曦	27	皇太子（第二皇子）	14	第一皇子	2
第四皇子（雍正帝）	27	明慧	13	蒙古王	2
第十四皇子（十四皇弟）	25	明玉	12	第三皇子	1
第十皇子（十皇弟）	21	若蘭	9	隆科多	1
玉檀	18	巧慧	6	年羹尧	1

表2の数字は何を意味しているだろうか。おそらくストーリーの構成に関係すると考えられよう。本作品では、女官である若曦が九人の皇子たちによる皇位争いという大きな背景の中に置かれ、各皇子と接しながら宮廷で生きていく人生が描かれており、彼らと関わる人物も含め、登場人物が多く、人間関係も複雑である。また、主人公の若曦だけでなく、彼女と緊密な関係を持つ皇子たち（特に第四、八、十、十三、十四皇子）および職場での親友である玉檀などもストーリーの展開において非常に重要な役となっている。こういった事情を踏まえた上で、具体的な状況に応じ、その数多くの登場人物1人につき1回のみ提示するのではなく、一話ごとに、最初に出現した時に、それが誰であるかの人物提示をするという傾向が見られた。したがって、主演であればあるほど、繰り返し注が付けられる頻度が高くなることも容易に推測でき、実際にそれに関する結果も表2により明らかになった。

これは、TTの送り手である翻訳者から、TTの受け手である視聴者への

- ① 数多く登場する人物を視聴者に印象付けるための工夫と
- ② 第1話からではなく、途中から見始める人でも話についていけるように、でき

るだけ早い段階で人物設定を把握してもらうための配慮であると考えられよう。また、話の展開に添って、同じ人物が違う段階で名称変更していることを注で明示していることによって、人物に纏わる文化要素も同時に視聴者に伝えられる。特に注目すべきは、「隆科多」と「年羹尧」である。彼らは主要人物にも皇族にも入っておらず、単なる朝廷に務める多数の官僚たちの中の一員ではあるが、本ストーリーの大きな時代背景となる皇位争いにおいて、雍正帝の即位に当たって大きな役割を果たした実在の歴史的人物である。それに対して、彼らと同じ頻度で登場している大臣たちや、更に彼ら以上に出現している人物（例えば康熙帝や雍正帝の側仕えをする太監、実在していない者も含む）は注にて言及されていない。このように、リスクを抱える注の中で1回ずつ提示することにより、映画鑑賞のプロセスにおいて視聴者にできる限り異国文化を知ってもらおうとする努力として評価すべきではないだろうか。

#### 4.3 内容提示の結果と分析

注のもう1つである内容提示は表1で示したとおり、425回という注全体のうち144回であり、全体に占める割合は3分の1（延べ語数）に留まっているが、異なり語数では全体の115回のうち84回であって7割以上を占めている。内容提示の注で、延べ語数と異なり語数の割合がこのように逆転的な組み合わせになっていることは、注が低頻度で重複している代わりに、様々な文化要素を網羅していることに繋がっていると考えられる。ここでは、まず内容提示の分布に注目し、その広範囲に渡る内容提示を、前述した8領域（①官職名と呼称、②社会一般、③芸術、④人物、⑤機関、⑥地名と場所、⑦歴史背景、⑧その他）に分けてデータをまとめると、表3のようになる。なお、宮廷要素に該当するものを内数として示す。

表3 内容提示の内訳

カテゴリー	延べ語数 (token)		異なり語数 (type)	
	全体	内宮廷要素	全体	内宮廷要素
官職名と呼称	74	74	21	21
社会一般	14	7	14	7
芸術	13	0	12	0
人物	11	6	10	5
機関	11 (12 <sup>9</sup> )	11	8	8
地名と場所	9	7	7	5
歴史背景	8	8	8	8
その他	4	0	4	0
合計 (宮廷要素)	144	113	84	54



注の内容に関する具体例分析は第5節で扱うことにするが、以上のデータから見られる通り、「官職名と呼称」に関する注が延べ語数で144のうち74を占めており、全体の半数以上となっていることが最も特徴的である。また、それ以外の項目では「その他」を除いてほぼ10回前後と均衡して分散していることから、様々な文化要素をバランスよく取り入れて紹介するという翻訳者の考慮も伺えると言えよう。とはいえ、宮廷要素か非宮廷要素かという視点から見ると、宮廷要素に関する注が113回もあり、4分の3という割合に上り、注全体（異なり語数）においても半数近くを占めていることも明らかになっている。

本作品は時代劇であると同時に、中国古代の宮廷変容もその大きな背景としてストーリーと共に展開していく。そのため、宮廷に纏わる知識はストーリーを理解する上で極めて重要な役割を果たしていると考えられる。注の大半が「宮廷」という特定の文化背景についての補足説明であるということは、TL (Target Language) の視聴者ができる限り異文化環境に近づけ、宮廷ドラマならではの特徴や味わいをより感じやすくさせる意図の表れだと言えよう。例えば「歴史背景」で歴史上の出来事などについて紹介されており、作品鑑賞プロセスにおいて、ストーリーの展開に対する理解および期待をSL (Source Language) の視聴者に近い形で得させることも目指しているのではないだろうか。

## 5. 注の具体例分析

### 5.1 人物提示

#### 5.1.1 名前ないし身分を提示

第4節においてすでに明らかにされた通り、合計425回も起用されている注のうち、3分の2が21人の人物提示に繰り返し使用されていることが特徴的である。画面に登場する人物が誰であるかを、名前ないしは身分で繰り返し提示することにより、数多くの登場人物およびその複雑な人間関係を確認することができ、視聴者が素早く確実にストーリーの人物設定を把握することができる。しかしそれだけでなく、ストーリーの進展とともに身分が変化していく人物に関しては、その変化と前後の対照関係を明示する工夫も見られる。

以下、典型的な例を挙げながら考察を加えていくが、その際に、注の表示内容を「～」(出典<sup>10</sup>)で提示し、また“→”を用いて筆者による説明ないし考察を加える。

例1: ① 「第四皇子 (のちの<sup>ようせい</sup>雍正帝)」 (1話)

→ 第1話において、第四皇子が乗馬姿で初登場する場面に付けられた注である。第四皇子であることだけでなく、括弧内に「のちの雍正帝」であることも提示される。この人物が後の帝王になる運命にあることを先に明示することにより、TT視聴者にSTの視聴者と近い知識背景を与え、今後のストーリー展開にできるだけ近い期待感と理解力をもたらす効果が得られよう。

② 「怡親王(第十三皇弟)」(26話)、「廉親王(八皇弟)」(27話)、「九皇弟」(30話)、「十皇弟」(27話)など

→ 第25話の後半より、時代が変わる。康熙帝時代には各皇子の身分が「第～皇子」であったが、雍正帝の即位によって帝王の兄弟という意味で「(第)～皇弟」へと相応に変化していくことも注にて明示されている。特に、そのうち、「怡親王(第十三皇弟)」と「廉親王(八皇弟)」は、雍正帝より特別に爵位が与えられ、台詞上においては人物間の関係と社会地位の差によってはどちらの身分も用いられる。その際の混乱を避けるため、両方の身分が提示されている。以上のように注を用いることにより、視聴者が台詞上に現れる人物間の呼称変化に戸惑いなく容易にストーリーについていく効果があると考えられよう。

### 5.1.2 カタカナで異質感を明示

日中は同じ漢字文化を共有しているため、人物の名前を容易に元のまま保留できるが、難しい、あるいは認知度の低いと思われる漢字にはさらに振り仮名を提示する配慮が見られる。しかし、一見同じ漢字の名前でも、振り仮名の付け方が微妙に違うところがある。表2に示されている通り、若曦じやくぎや廉親王れんのように、名前および皇帝に封じられた爵位名には振り仮名が付けられているが、そのうちの殆どがひらがなで漢字の音読みを提示しているのに対し、「隆科多」(24話)のみがカタカナ表示で、SLに近い音を再現している。なぜこのような違いが出ているのであろうか。そこには、隆科多ロンコドという歴史上実在した人物が本来満州族であることが関係していると考えられるのではないだろうか。中国には漢民族の他に、55の少数民族が住んでおり、民族ごとに各自の言語、文字を持っていることが多い。実際に、満州族では満州語が使われている。それらの少数民族が漢民族社会においては自分の名前を当て字で漢字に訳して使うのが一般的となっている。ここの「隆科多」がまさにその一例であり、元の音そのまま引継がれ、カタカナ表示で区別することにより名前の特殊性が明示されている。こうした注の細かい差異化の工夫にも、異文化の要素をなるべく大事にすくい取りながら伝えようとする意図が窺える。

## 5.2 内容提示

ここでは台詞の字幕翻訳などで言及された異文化要素に付けられた注を扱う。人物提示は画面上の人物自体に対する説明であったが、内容提示はそれとは異なり、注が付けられる項目がほぼ<sup>11</sup>言語的に存在する。そこで具体例分析では、例えば「公主…皇帝の娘のこと」(3回登場、2話に初出)のように、まず注が付けられる項目を示した後に、それに対する注を添える。場合によって注の後ろに括弧で使用回数を明示する。

### 5.2.1 官職名と呼称

表3で示した通り、官職名と呼称については、内容提示全体の延べ語数と異なり語数において、それぞれ半数以上と4分1となっている。この高い割合から、翻訳者が朝廷における社会関係に注目していることが十分確認できる。それらが異文化要素として具体的にどれほど注を通して紹介されているかを見てみると、固有の爵位名詞と少数の官職名が「尚書...清代の役職」(8話)、「内閣大学士...清代の官職名」(9話)、「一等公...爵位の1つ」(30話)のように、それぞれ爵位と官職名であることのみ提示されている以外(例2を参照、括弧にて回数と初出を提示し、1回の場合は出典のみ。以下同様)、大半は「九門提督...城門の防御を担当」(25話)、「吏部尚書...人事を司る長官」(33話)のように、「どのような身分なのか、あるいはどのような職なのか」といった簡単な説明まで加えられている(例3を参照)。また、「貝勒、嫡福晋、側福晋、福晋」といった台詞上に頻繁に出現するものは人物提示と同様、繰り返し注が付けられることも特徴的である。そうすることにより、人物間において、社会地位の差異によって現れる行動の仕方(お辞儀や礼など)や話し方(挨拶用語など)の違いへの理解がより深まるのではないだろうか。

例2:「貝勒...清代の爵位」(21、2話)、「常侍郎...清代の要職」(3話)

例3:「嫡福晋...清代の正室」(8、1話)、「歩軍統領...都の警察職」(17話)

### 5.2.2 社会一般

社会一般で括っても実は範囲が広すぎる。その下位分類として更に様々な分野に分けることができるが、このカテゴリーに含めた異文化的項目はそれぞれ習慣・風習、思想、社会制度、刑法、言い伝え、言葉などといった分野から14も異なったものが取り入れられていることが確認できた。注の付け方に関しては、いずれも具体的にどのような物・ことなのか詳しく補足されており、特に、その内2つ挙げられた満州語の人名もすでに人物提示で考察された「隆科多」と同様に、カナカナで振り仮名が付けられている。以下例4にていくつか具体例を提示する。

例4:「春聯...春節に貼る縁起の良い対句の札」(5話)、「八旗...満州族が属する社会・軍事集団」(17話)、「凌遲刑...肉を切り落とし死に至らせる刑」(27話)、「塞思黒...“卑怯者”という意味」(35話)(いずれも1回のみ)

### 5.2.3 芸術

時代劇が現代劇と大きく異なる場所として、セッティングや衣裳以外に、台詞上において文語標識や四字熟語、詩詞などの多用で作り上げた古代風表現が代表として挙げられよう。本作品においても、各時代における有名な詩詞や名句が多々引用され

ている。それら合計51箇所(述べ語数)の訳出について詳細は紙面の関係で提示しないが、そのほとんどが形式保持のままで翻訳されていることが作品全体を通して確認できた。その内の12箇所(2割)の訳出に注が付け加えられており、それは、なるべく中国の古典文化に関して重要だと思われる知識、特に本作品において名台詞になっているところを紹介しようとする翻訳者の姿勢だと捉えられよう。ただ、その注の付け方を見てみると、ほぼ出典のみの提示になっている。とはいうものの、詳しい意味や鑑賞までは無理ではあるが、出典に適宜振り仮名を提示することだけでも、関心を寄せてさらに詳細がほしいというような視聴者には十分検索できる便宜を提供することになるだろう。以下、例5にて具体例を挙げておく。その際<>にて1画面の字幕を提示する。訳出上の形式保持の対比のために中国語原文も括弧内に添えておく。

例5:

①「王維の詩「終南別業」(18話)

<“行きては至る 水極まる所”>(行到水穷处)

<“座して見る 雲起こるとき”>(坐看云起时)

→ 主人公の男女(第四皇子と若曦)の愛情の象徴とも言える名句である。

②「屈原「離騷」より」(21話)

<“夕に秋菊の落英を食う”>(夕餐秋菊之落英)

→ 度々台詞に登場し、雍正帝が憧れた人生境地を表す一句である。

しかし、TT側の視聴者にできるだけST視聴者の理解に近づけて作品を楽しんでもらうためには、もう少し工夫の余地があると思われる事例もあった。以下例6にて提示する。

例6:<“惜しむは秦皇漢武 文采に劣り”>(惜秦皇漢武 略输文采)

<“唐宗宋祖 風騷に遜る”>(唐宗宋祖 稍逊风骚)

(ここから注が提示される)「毛沢東「沁園春 雪」より」(3話)

<“一代の天驕 チンギス・ハンも”>(一代天驕 成吉思汗)

<“大雕を射るを知るのみ”>(只识弯弓射大雕)

<“希代の人物を数えるならば”>(俱往矣 数风流人物)

<“現王朝を見よ”>(还看今朝)

ここで提示した例は、主人公の若曦が康熙帝と初対面した時に詩を引用した場面である。皇帝の機嫌を損なってしまうようなところで、康熙帝に対する評価の言葉が求

められ、考えた末、中国第一代目の主席であると同時に詩人としてもよく知られている毛沢東による名作品でうまく対応する。結果として、皇帝が若曦の才能に感心し、機嫌を直して褒美まで与えることとなったのであるが、SLの視聴者なら、その詩が毛沢東の詩であることを誰でも知っていること、それが現代の詩であるため、過去の時代の康熙帝は初耳で感心したことを、タイムスリップという設定からくるトリックだとすぐ理解できる。それに対するTTでは、途中から詩が唱え終わるまで、スクリーンの端にて「毛沢東「沁園春 雪」より」と注が提示されて、異文化要素を積極的に伝えようとする姿勢が見られる。しかし、毛沢東が詩を書き残していたことを知らない場合、STの受容者と同じ理解を得ることは難しくなるだろう。せつかく異文化要素の提示として注を入れるのであれば、万が一の可能性に備え、もう一工夫して例えば「現代詩人毛沢東名作「沁園春 雪」より」のように、更に詳細を提示することで、よりよい効果が期待できるかもしれない。

以上、芸術のカテゴリーに詩詞や文学作品に関する注が圧倒的な割合を占めているが、歴代の皇帝に賞賛される名画に関する注も一箇所確認できた。また、それについても絵の内容が補足され、極力視野を広げて異文化要素を取り入れる努力だと評価できよう。

例7:「耕織図...稲作と養蚕を描き皇帝に献上された画集」(21話)

→これは康熙帝の台詞の字幕<「耕織図」に似ておらんか?>に対する注である。

#### 5.2.4 人物

歴史上実在した人物や伝説上の人物も、会話の中で数多く言及されている(確認できている限りで73名)。その内、合計10名が11回注で補足説明されている。内訳を見てみると、索額図・ガルダン・年羹堯・弘曆のように、ストーリーの背景と進展に直接関わっている重要度の高い内容がほぼ半数を占めているのに対し、そのほか、楚の襄王・虬髯客と紅払・稽康・丘処機・夸父・蘇麻喇姑のように、主に翻訳者自身の自主判断によりそれぞれ違う領域から取り入れられていると考えられるものもある。注の内容に関しては、人物の身分や功績、結末、出典、人物に纏わる時代背景など様々な角度からとりわけ詳しい説明が入っている。いずれも中国文化において一般教養としてよく知られている知識ではあるが、ストーリー上重要だと思われる内容とそれ以外の個々の訳出がバランスよく組み合わせられている。これは、翻訳者が翻訳時において一定の目的に沿って能動的に動く姿勢として捉えることもあり得よう。以下例8にて代表例を提示しておく。

例8:「弘曆...次期皇帝 乾隆帝」(29話)

「稽康...魏の文人で竹林の七賢人の一人」(5話)

### 5.2.5 機関

各国における政府の機関設置は多少異なるが、大抵職能が共通している部門が多く、また日中間では同じ漢字文化のおかげで実際に名称の提示のみで容易に特定できる場合が多くある。しかし、本作品の時代背景である清朝となると、状況が違ってくる。それらの異文化要素を翻訳する時に、分かりやすく相応する現代の言い方に置き換えるのも1つの方法だが、本作品では、漢字を複製して更に注で機関職能について補足を加えるという、異文化を積極的に伝えようとする手法が取られているのが特徴となっている。人物提示のように繰り返し注を付けられることは少ないが、厳しい制限のかかっている中で網羅的に主要な機関名（礼部、刑部、議政処、工部、兵部、戸部、吏部、侍部）を考慮している点においては、十分異文化交流を図る姿勢として評価できるのではないだろうか。以下、代表例を例9にて提示しておく。

例9：「刑部...司法を司る」（3、7話）、「戸部...財政を司る」（16話）

### 5.2.6 地名と場所

すでに5.2.4で考察された通り、人物は比較的各領域よりバランスよく取り入れられているのに対し、地名と場所の項目では、宮廷関係、特に皇帝に纏わる要素が重点的に紹介されていることが明らかになった。例えば、乾清宮・養心殿のように、作品の時代背景で康熙帝および雍正帝が日常的に最も緊密に関係する場所や、永和宮・郭絡羅府のように、ストーリー上よく現れる皇族たちの住居地、天壇のように宮廷文化において価値の高い名所などが意図的に取り入れられている。またCBDという現代表現や、大柵欄という北京の有名な商店街を紹介するなど、清朝においても現代においても中国の政治文化経済の中心地であり、かつTL側において認知度と関心度が高いと思われる北京に関する情報をできるだけ視聴者に伝えようとする異文化コミュニケーションの姿勢が窺える。以下代表例を例10にて提示する。

例10：「乾清宮...皇帝の寝台と執務室」（3、6話）、「CBD...北京のビジネス中心地」（1話）

### 5.2.7 歴史背景

一定の実在した歴史背景に基づいて作られた視聴覚作品では、ST視聴者が理解に必要な背景知識を持ち合わせていることが前提されているが、TT視聴者は特定の背景を知らないために、当然ながらST視聴者と同じような鑑賞体験を得ることが難しい。そのようなギャップをできるだけ埋める工夫として、翻訳者による歴史背景に関する注が8箇所確認できた。注の詳細を見ると、すべてがストーリー構成上において重要な手掛かりとなっている皇位争いに関係している。その内、歴史上においても有名であるこの皇位争い事件を表す表現「九王奪嫡」の用語説明が付けられ（例11を参照）、

それ以外にはそれらの皇子たちが皇位をめぐる争いにおいて、それぞれどのような結末に繋がったかという背景が紹介されている。以下例 12 にて、いくつかの注が起用される具体的な場면을提示しながら考察してみよう。

例 11: 「九王奪嫡...皇子による康熙帝の後継者争い 勝者は第四皇子」(1 話)

例 12: 「雍正帝により獄に繋がれる」、「幽閉後 何者かに毒殺される」、「乾隆帝即位まで軟禁される」、「獄に繋がれ 失意のうち死亡」(いずれも 2 話)

→ 第 2 話で、第十皇子の寿宴を祝いに皇子たちが集まる場面である。「九王奪嫡」という皇位争いで負けることになる第八・九・十・十四皇子にクローズアップ・ショットされ、それぞれ満面の笑顔が映るシーンとその後の結末の白黒のシーンが交互に切り替わり、同時に注にて補足される。文字のみの小説と異なり、視聴覚作品では映像で場面の切り替えが対比効果を生み、この一連のシーンは、一瞬現れる「和」と運命の「儚さ」が対比されて視覚的に強いインパクトを持つ。このような状況の中で、TT 視聴者に注で文字説明を提示する試みは、ST 視聴者とできるだけ同じように作品を楽しんでもらうための非常に有効な策だと評価できよう。

### 5.2.8 その他

以上、それぞれ①官職名と呼称、②社会、③芸術、④人物、⑤機関、⑥地名と場所、⑦歴史背景における注の使用を考察してきたが、そのほかにも、⑧その他の項目に分類した注の使用例が 4 つ確認できた。それぞれが、「鳳血玉...鳳凰の血が岩に染まりできたと言われる伝説の玉」(5 話)、「虎杖茶...むくみ・抗菌作用がある」(17 話)、「風湿病...湿気が体内にこもり悪化する病気」(21 話)、「小銭...民間で鑄造した貨幣」(22 話)であり、数がかなり限られている割に、互いに異なった分野から取り入れられている。また、お茶や医学など日本文化に大いに影響しているものと、それ以外の個々の訳出における取捨選択に委ねられると思われるような内容が半々に分かれている。これは 5.2.4 ですでに考察された人物に関する注と偶然にも一致し、そこと同じような現象を示唆する一例としても見なすことができるのではないだろうか。

## 6. 考察

### 6.1 注からスコposへ

言葉は文化の 1 つで、またその文化を反映しているとも言えよう。「小説や詩、歌、劇などの様々な形で言葉が用いられ、それを通してその背景となる文化が窺える」(Akbari, 2013:13)。そのため、翻訳は単に意思疎通を行うコード変換過程だけではなく、異文化間交流の役割も果たしていると思われる。特に起点文化にしかない特有の文化要素をいかに目標側の受容者に伝えるかは翻訳プロセスにおいて避けられない難点の 1 つと言えよう。上述したように、字幕翻訳では時間・空間上の制約を受けるた

め、個々の言葉よりも全体のコンテキストが優先される傾向があり、一般的に削除や改変、凝縮などの方法により、元の台詞が一部失われる結果になることが多い。そのような厳しい状況の中で、本作品における注（特に異文化要素に関するもの）の多用には、異文化コミュニケーションに対する字幕版作成者の姿勢が強く示されていると言えるだろう。

また、注の内訳を見てみると、視聴者ができるだけ早い段階で作品の世界に馴染み、ストーリーを理解しやすいように、登場人物と宮廷に纏わる要素を主に提示するという TL 受容者への配慮が窺えると同時に、大量の注を使用することにより、異文化要素を明示して、TL 受容者を起点文化にできるだけ近づけるという姿勢も見られる。こうした注の付け方から推定できる日本語字幕版作成のスコピスとしては、「意思疎通を大前提にして、TL 視聴者に、理解しやすい、かつ SL 視聴者にできるだけ近い理解と期待で楽しめるテキストにすることと、宮廷が背景となる特殊な文化世界を提示することの均衡を図ること」とまとめることができよう。

## 6.2 注の特徴

4 節で作品翻訳時のスコピスを推定した上で、5 節で具体的な例を用いながら検証してきた。その結果として、注が付けられる内容および注の付け方を分析することによって、1 つの大きな特徴が明らかになった。それは、人物提示や内容提示の中の官職名・呼称などにおいて、繰り返し注が付けられる項目が多くあったことである。字幕翻訳というもともと字数が厳しく制限されている状況の中で、注を起用すること自体リスクが高いにもかかわらず注が繰り返されることは更に異例だと考えられよう。これは何を意味しているのだろうか。無論、人物提示のように、複雑な人物設定を考慮し、繰り返し注を入れることによって視聴者にストーリーについていきやすい環境を作る意図も推定できようが、異文化要素をただ単に紹介する程度にとどまるのではなく、官職名や呼称のように、様々にある異文化要素項目の中で重点を絞り、それをこの一瞬にして流れていく短い時間の中で、繰り返し注を付け加えることによってできるだけこの場で視聴者の印象に残したいという姿勢としても捉えられるのではないか。このように、重点的に繰り返される注以外では、紹介程度に触れるだけの注の項目は多岐に渡る分野からバランスよく取り入れられている。注の内容と付け方におけるメリハリも翻訳時におけるスコピスの 1 つの現れであろう。

## 7. おわりに

視聴覚翻訳は文学などの翻訳とは大きく異なり、時間・空間制限を始め、様々な制約を受けているため、原作のすべてを TT 受容者に伝えることは到底不可能である。異文化要素が様々に織りなされた作品の場合、翻訳は一層困難である。本稿では、視聴覚翻訳において通常なら使用が難しいと考えられる注という翻訳手法が、中国宮廷ドラマ『步步惊心』に大量に盛り込まれていることに注目した。まず量的分析により



注データ全体の使用に関する全体的傾向を調べることによって、注の分布を明らかにし、そして注の使用がどのようなスコposに繋がるのかを推定した。以上を踏まえた上で、具体例分析においては異文化要素の分類ごとに注がどのように付けられ、それがどのような効果をもたらすのかを考察した。結果、以下の結論が得られた。

まず量的分析により、人物提示が繰り返し使用されること、8分類に分かれる内容提示に関する注が全体の傾向としてそれぞれ均衡に取り入れられている中で、作品の大きな特徴である宮廷要素に重点が置かれていることが明らかにされた。この二点から、翻訳者が翻訳時におけるスコposを「意思疎通を大前提にして、TL 視聴者に、理解しやすい、かつ SL 視聴者にできるだけ近い理解と期待で楽しめるテキストにすること、宮廷が背景となる特殊な文化世界を提示することの均衡を図る」ということに関連づけることができた。

次に、注の付け方に関しては、人物提示において特に固有名詞の場合振り仮名が付けられていることが多く、更にカタカナを使用することによって SL 文化の中においても異文化と見なされる部分を際立たせる試みもなされた。それに対して、内容提示においては、とりわけ詳しい説明まで伝えられているケースが大半を占めており、芸術の項目では出典のみの提示となっているが、それだけでも更なる検索に必要な情報を十分提供できていると評価できよう。また、注が付けられる対象の選定においては、様々な分野から異文化要素が網羅的に取り入れられてはいるものの、ストーリー自体に直接関わっており、作品鑑賞に重要だと思われる要素、および宮廷の中心にある皇帝・皇族に纏わる要素に重点が置かれていることが確認できた。とはいえ、それ以外の個々の訳出における取捨選択に委ねられて選ばれたと思われる要素も一定の比例を占めており、翻訳者が翻訳時において一定の目的に沿って能動的に動く姿勢も具体例分析によって証明されたと言えよう。Tahir Gürçağlar (2011) や Toledano Buendía (2013) によれば、普段多くの場合においては ST と TT の背後に隠れている翻訳者の姿が、注の使用によって TT と TT 受容者間で文化間の仲介者として可視化され、視聴者に向かって注で対話する形で両世界を繋げていく役割が果たされる。本稿で検証した結果もまさにそれに対する 1 つの例証となるだろう。しかし、行為主体者 (agent) の多様性の問題もまた留意すべきである (Tahir Gürçağlar, 2011:115)。注という翻訳手法の使用と何に注を付けるかという決定は、翻訳者個人のみならず、その他の関与者 (出版社や編集者など) の影響も大いに関係するとともに、そうした翻訳時の判断には一定の翻訳規範や制度からの影響も考慮に入れなければならないだろう。これらの問題については、今後の研究に回したい。

最後に、注が字幕全体にどのような働きをもたらしたのだろうか。具体例分析によって明らかにされた通り、時間・空間などの制限により字幕上で伝えきれない異文化を注にて大いに補足できたことは言うまでもなく、本作品をスムーズに鑑賞・理解する上で重要となる宮廷文化や時代背景に関する知識を伝えることにより、TL 視聴者にできるだけ SL 視聴者に近い理解と期待を持たせる効果も大いに引き出されていると

考えられよう。特に、5.2.7の歴史背景で考察された通り、視聴覚作品の利点をうまく利用した代表例として、映像および注の融合で視聴者にインパクトを与えたケースが見られた。

以上、今回の分析で得られた結論であったが、いくつか問題点と課題も見えてきた。様々な制約がかかっている視聴覚翻訳において、注の使用は疑いなく大いに情報補足の役割を果たせると考えられるが、翻訳者が極力伝えようとしている内容は、限られた時間・空間の中で一体どれほどTT視聴者に届いたかについての調査も必要であろう。つまり、こうした注の使用によって実際の鑑賞プロセスでは視聴者にとって理解の助けとなったのか、あるいは負荷が大きくなり過ぎてかえって支障となったのかといった側面について検証する必要があるだろう。また、今回の分析はあくまでも個別のケーススタディにとどまっているため、決して視聴覚翻訳全般における注使用の有効性の証明にはならない。注の必要性および実効性は日中のような類似性の高い言語ペアに限られるか、あるいは時代劇のような多くの異文化要素や時代背景を特徴とする特定分野に限られるか、そして、注が視聴覚作品全般において実際にどのように使用されているかについても、更なる研究が必要であろう。それは今後の課題としたい。

---

#### 【著者紹介】

鄭 雁天 (Zheng Yantian) 神戸大学国際文化学研究科博士後期課程在学中。研究方向は機能主義的翻訳および視聴覚翻訳。主に日中間における字幕翻訳研究に従事。

---

#### 【注】

- 1 近年視聴覚翻訳の新しい分野として注目されてきているファンサブにおいては、注の使用が多く見られる。ファンサブ翻訳とは、アマチュアによる非公式の字幕作成及び映画、テレビ・シリーズ、アニメをオンライン配信する実践のことを指す。メディアの発達、特にP2P通信などによるファイル共有技術の発展 (Bayar 2012:5) により、飛躍的な成長を成し遂げてきた。中国では、それを作る主体のことは『字幕組』と呼ばれている。ファンサブは、字数制限が緩く (Bogucki, 2009:50)、また、作り手がほとんど若者であるため、通常の字幕ではなかなか見られない訳出、特に流行語や若者言葉などの使用が特徴的である。しかし、著作権侵害など、法的に疑わしいところや倫理的問題 (Díaz Cintas & Muñoz Sánchez 2006; Hatcher 2005) もあるとされる。ファンサブについて、本稿では深く言及しないが、興味深いテーマの1つとして、これからの研究の課題にしていきたい。
- 2 Gambier (2013:49-52) によれば、視聴覚翻訳が異言語間字幕 (Subtitling)、二カ国語字幕 (Bilingual Subtitling)、同一言語内字幕 (聴覚障害者用字幕など)、吹き替え (Dubbing)、リボオイスイング (Revoicing)、ボイスオーバー (Voice-over)、舞台字幕 (Surtitling) といく

つかの種類に分類されている。そのうち、字幕と吹き替えが視聴覚翻訳の主流形態となっている。

- 3 情報源『宮廷女官 若曦 (ジャクギ)』公式サイト 閲覧日：2013年6月10日  
<http://www.bubujingxin.net> (中国語公式版)  
<http://jyakugi.com> (日本語公式版)  
<http://www.bs-j.co.jp/jyakugi/index.html> (BS ジャパン版)
- 4 湖南省の衛星 TV 局では、縮約されて独自に 40 話に編集され放送された。DVD 版より内容が少しカットされたらしいが、まだ確認できていない。また、合計時間も、今では調べ直しが難しい。
- 5 日本語字幕は本多由枝による。
- 6 ペダーセンは ERC を以下の 12 領域に分類している：① Weights and measure (度量衡)、② Proper names (固有名詞)、③ Professional titles (職業上の役職名)、④ Food and beverages (料理及び酒類)、⑤ Literature (文学)、⑥ Government (政府)、⑦ Entertainment (娯楽)、⑧ Education (教育)、⑨ Sports (スポーツ)、⑩ Currency (通貨)、⑪ Technical material (技工物)、⑫ Other その他。日本語訳は篠原 (2013:82-83) の訳をそのまま引用。
- 7 卞(2008)によれば、西洋の翻訳研究界において、機能的アプローチには幾つかの学派があり、そのうち、イギリス言語学者ハリデー (Halliday) の選択体系機能理論に基づく学派、及びフェアメア等のスコポス理論的アプローチが代表するドイツ発祥の学派が主たるものである。前者は主にディスコース、コンテクストに関する研究である。本稿では、スコポス理論 (翻訳の目的) が中心となるドイツの学派を扱う。
- 8 藤濤(2007)によれば、「目的」を意味するギリシア語 *Skopos* が、フェアメアの翻訳理論では「翻訳の目的」を表す専門用語として使用されており、また、「スコポス理論」という名称は最初 Reiss/Vermeer(1984)で登場したが、その理論の骨子は Vermeer(1978)ですでに完成されていたという。
- 9 「官職名と呼称」の項目の中に、官職のついでに機関の紹介も入っている注が一箇所あるため、延べ語数で1回と加算し、括弧にて提示する。
- 10 注が複数箇所に繰り返し登場する場合は初出のみ提示する。
- 11 項目⑦の「歴史背景」には、台詞上の言語項目ではなく、画面に出ている人物に対してその人物に纏わる背景知識を紹介するという例外がある。例 12 に当たる。

#### 【参考文献】

- Akbari, M. (2013). The role of culture in translation. *Journal of Academic and Applied Studies* (Special Issue on Applied Linguistics), 3(8): 13-21.
- Bayar, S.C. (2012). Online practice of fan-based subtitles : the case of the Turkish translator, Thesis.  
<http://oathesis.eur.nl/ir/repub/asset/11257/Bayar,%20S.C.pdf> (Jan.7,2014)

- Bogucki, Ł. (2009). Amateur subtitling on the internet. In Diaz Cintas, J. & Anderman, G. (Eds.) *Audiovisual Translation: Language Transfer on Screen*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- de Linde, Z. & Kay, N. (1999). *The Semiotics of Subtitling*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Díaz Cintas, J. & Muñoz Sánchez, P. (2006). Fansubs: Audiovisual translation in an amateur environment. *The Journal of Specialised Translation*, 6: 37-52.
- Franco Aixelá, J. (1996). Culture-specific items in translation. In Álvarez, R. & Vidal, M. C. A. (Eds.) *Translation, Power, Subversion*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Gambier, Y. (2013). The position of audiovisual translation studies. In Millán, C. & Bartrina F. (Eds.) *The Routledge Handbook of Translation Studies*. London & New York: Routledge.
- Hatcher, J.S. (2005). Of otaku and fansubs; A critical look at anime online in light of current issues in copyright law. *Script-ed*, 2(4): 514-542.
- Pedersen, J. (2011). *Subtitling norms for television : an exploration focusing on extralinguistic cultural references*. Amsterdam: John Benjamins.
- Reiß, K. & Vermeer, H. J. (1984/2013). *Towards a General Theory of Translational Action: Skopos Theory Explained*. (Translated by C. Nord). Manchester: St. Jerome Publishing.
- Tahir Gürçağlar, Ş. (2011). Paratext. In Gambier Y. & van Doorslaer, L. (Eds.) *Handbook of Translation Studies* (2: 113-116). Amsterdam: John Benjamin.
- Terestyényi, E. (2011). Translating culture-specific items in tourism brochures. In *SKASE Journal of Translation and Interpretation* [online], 5(2):13-22.  
[http://www.skase.sk/Volumes/JTI06/pdf\\_doc/02.pdf](http://www.skase.sk/Volumes/JTI06/pdf_doc/02.pdf)  
<http://www.skase.sk/> (homepage) (Jan.7,2014)
- Toledano-Buendía, M. C. (2013). Listening to the voice of the translator : A description of translator's notes as paratextual elements. *Translation & Interpreting*, 5 (2): 149-162.
- 藤濤文子(2007)『翻訳行為と異文化間コミュニケーション — 機能主義的翻訳理論の諸相 —』松籟社
- ピム, アンソニー(2010)『翻訳理論の探求』(武田珂代子訳) みすず書房
- 篠原有子(2013)「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素(日本的有標性)の翻訳方略に関する考察」『翻訳研究への招待』第9号: 81-97. 日本通訳翻訳学会
- 卞建華(2008)『传承与超越: 功能主义翻译目的论研究』中国社会科学出版社
- 『宮廷女官 若曦(ジャクギ)』公式サイト  
<http://www.bubujingxin.net/> (中国語公式版)  
<http://jyakugi.com/> (日本語公式版)  
<http://www.bs-j.co.jp/jyakugi/index.html> (BS ジャパン版)  
(2013年6月10日)

映像作品

『宮廷女官 若曦(ジャクギ)』全話(35話) 日本語字幕版 アジア・リパブリック

『步步驚心』全話(35話) 中国語オリジナル版 上海唐人電影制作有限公司

